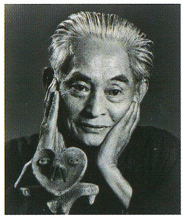
春の特別展

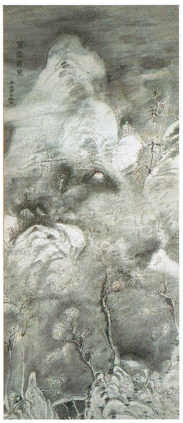
川端康成

文豪の愛した美の世界

2006年4月8日(土)～5月21日(日)



ハニワ(好頸部　胸部)とともに、ほほ笑む川端



国宝　凍雲篩雪図

国宝　十便図のうち釣便図　池大雅
江戸時代1771年(明和8)

川端康成は、執筆活動のかたわら、美術にも深い造詣を持ち、評論家や画家との交流を通じて多数の美術品を所有したことでも知られています。なかでも、日本画家東山魁夷との交流は、互いの創作活動に関わる親密なものとなり、文学と美術を結びつける新たな世界を生み出しました。魁夷が文芸誌「新潮」の表紙絵を描いていたときに、新潮社の編集者が川端康成に引き合わせ、川端康成の自宅を訪れた際には、浦上玉堂「凍雲篩雪図」と池大雅と与謝蕪村の競作「十便十宜図」など、のちに国宝に指定された名作の数々に出会いました。

本展覧会では、川端が所有する美術品や、執筆原稿、魁夷の日本画作品との交流の様子を示す挿絵原画等を展示し、美と文学の融合を目指した両者の交流の様子を紹介します。

秋の特別展

川崎小虎展

2006年9月23日(土・祝)～11月19日(日)

川崎小虎は東山魁夷の義理の父にあたり、東京美術学校や帝国美術学校の教授を勤めた日本画家として知られています。今回の展覧会では、東山魁夷との親子展として小虎と魁夷の本画作品や小虎が絵画の技術的な修練として制作した源氏物語絵巻や信貴山縁起絵巻の模写絵など約30点を展示します。

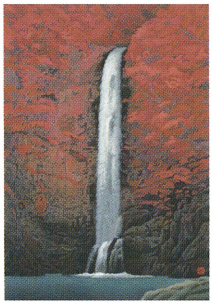
第1期テーマ作品展　2006・5月27日(土)～7月17日(月・祝)

【桜咲く、春を静かに待つ】1階展示室

自然の生きる姿と、それとは裏腹に衰滅していく自然の摂理、変転する様子は、人の生命のあり様と変わらないと語る東山魁夷の、春浅く淡い紅色の慎ましさが漂う頃から桜咲く繚乱とした幻想的な春を描いた作品を紹介する。

【森への誘い/瀑布幽寂】2階展示室

深い山々を追い求めて描くなかでも、滝との思いがけない出会いは、どこか幻想的であり、幽寂な響きに心奪われるひと時でもある。「現実に見たものなのかあるいは漠然とした遠い存在であったのか」と語る東山魁夷が心の中に描き続けた滝を紹介する。



渓音

春静

第2期テーマ作品展　7月20日(木)～9月18日(月・祝)

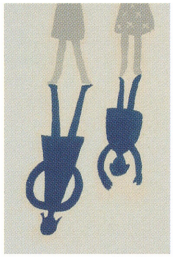
【白い馬が見える風景/生命の象徴、祈り】1階展示室

ほとんど動物が登場しない魁夷の作品のなかで例外といっていいのが、白馬である。古くは道を描いた青森での取材の際に、実際に見て描いたものであったが、その後、厳冬のなかでの生命の象徴として改めて姿を現すこととなる。「白馬の森」や「緑響く」など、白馬が登場する代表作を版画作品で綴る。

【小さな窓に四季を彩る/『新潮』表紙絵】2階展示室

魁夷は生涯に多くの押絵、書籍の表紙絵を手がけている。今回の展示では、雑誌「新潮」の依頼により、「夢の詩」、「季の詩」の2作を紹介する。いずれも、軽快で洒脱な絵作りに徹し、魁夷の素心が垣間見える作品群といえるものである。

白馬の森



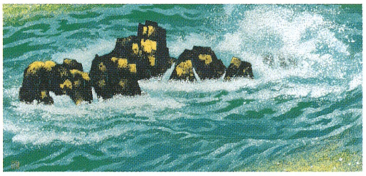
夢の詩2月

季の詩11月

第3期テーマ作品展
11月23日(木)～2007・1月28日(日)

【唐招提寺への路/山雲・濤声】1・2階展示室

唐招提寺御影堂のための障壁画制作を依頼されたのが1971年であった。翌年1年間は鑑真和上と唐招提寺の研究にあて、奈良大和路の自然と歴史、文化の研究につとめ、障壁画の主題を鑑真和上が渡ってきた日本海と迎え入れた日本の山々に決定する。制作準備のために1973年1月から日本各地を旅行し、山と海を写生する。75年、御影堂に第一期《山雲・濤声》が奉納、第二期の中国を主題とした水墨画が80年に完成した。完成に至るまでの経過をたどる。



満ち来る潮

潮騒

第4期テーマ作品展　2月1日(木)～4月15日(日)

【「北欧紀行　古き町にて」を読む】1階展示室

昭和34年憧れの北欧を訪れ、のちに版画詩画集として発刊された『北欧紀行　古き町にて』。北ヨーロッパの風情を体感しながら描いたスケッチは、旅先での出会いを綴った魁夷自身のことばが添えられており、一層穏やかで温かみを感じさせるものとなった。

【雪月花/日本の心と風情】2階展示室

日本人特有の季節感を物語る「雪・月・花」をテーマに展示するもので、秋の月に始まり、冬の雪、春の花を描いた魁夷の作品を紹介する。「二つの月」「月出づ」「たにま」「花明かり」「吉野の春」などを展示する。

吉野の春